

ローマ人への手紙 # 39 「イスラエル人の特権」 9:1～5

2024/3/23

はじめに

パウロは、この手紙のテーマ主題を冒頭の 1 章 16.17 で要約しています。

1:16 b-17 福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

パウロ書簡の順序は通常、挨拶があり、教理（教え）の後に、適応（生活）、挨拶というのがほとんどです。しかし、ローマ人への手紙の手紙は適応の前に 9-11 章の 3 章を割いて、もう一つの大きなテーマが記されています。それが「イスラエルの救い」です。

1～8 章では福音による救いについて語られてきました。全人類は神の前で有罪であるとしてから、イエスキリストの福音による義認、聖化、栄化という 3 つの階段を上って、その頂上である 8 章の最後では、「クリスチャンは圧倒的な勝利者である」ということ。そして「あらゆる試練や苦難、その他どのような被造物もキリストにある神の愛から私たちを引き離すものはない」とパウロは賛美し宣言しました。これは私たちの確信でもあります。

この 8 章の余韻の中、9 章はパウロの深い悲しみの告白から始まります。なぜなら、8 章で勝利の賛美を叫ぶ教会の中心に、本来いるべき神の契約の民イスラエルの姿がないという信じ固い現実があったからです。

1.イスラエルの救いをどう考えるべきか

皆さんに質問をしたいと思います。「イスラエルは救われているでしょうか」

もう 20 年以上も前になりますが、K 先生と交わした対話をいまだによく覚えています。それは次のようなものでした。当時、先生はさらに深く聖書を学びたいということで、エルサレムに住み始められた頃でした。現地のメシアニックジューのセンターでスタッフと

して働き、日本との間を行き来されていました。皆さんの中にもイスラエルに旅行へ行かれたことがある人がいると思いますが、多くの人は大変感銘を受けられるそうです。

イスラエルは長い歴史を持った国であり、ユダヤ人はトーラーを命のように大切にし、幼いころから暗唱します。男子は生後8日目に割礼を受け、忠実に安息日を守り、熱心に神に祈ります。神が定められた祭りをを行い継承しています。歴史、文化、生活に神との歩みが溶け込んでいます。

イスラエルを実際に体験し、ユダヤ人と共に生活をしているK先生に、青二才の私は質問しました。「ユダヤ人はイエス・キリストを信じてないのでしょうか？では彼らは救われていないですね」と。K先生は、「私ら異邦人はイエスを信じることによって救われる、でもユダヤ人は旧約聖書の神を信じ、御言葉を生きている。私はそれで救われていると思う」と答えられました。カトリックやコプト教会にも繋がっておられたので、福音派のクリスチャンの偏狭さについても意見されました。その後、お考えが変わられたかどうかは分かりません。

私は、その答えにすっきりしませんでした。そういうものなのかと思いました。今でしたら、自分の信仰のよりどころとしている御言葉から、はっきりこう言えます。「ユダヤ人も異邦人も、ただイエスキリストの福音を信じる信仰によって救われます」と。「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです」（使徒4：12）と。

冒頭の「イスラエルは救われているのでしょうか」に対する私の答えは、「イエスをメシアと受け入れ、その福音を信じているユダヤ人は個人的に救われているが、多くのユダヤ人は救われておらず、イスラエルは国家的には救われていない」

そうすると、次のような疑問が湧いてきます。「それでは、イスラエルの不信仰という現実と状況によって、神の選びは変更され、イスラエルを見放されたのか」という問題です。この疑問についてパウロは9～11章を割いて答えているのです

この「イスラエルの救い」について記されている9～11章には、大きく分けて3つの神学的な立場があります。

- ①省略する 置換進学の立場
- ②軽視する 挿入句的であるという立場
- ③重視する 神が3章も割いて啓示しておられる内容が軽いはずはない。

2. パウロの苦悩

9:1 私はキリストにあって真実を語り、偽りを言いません。私の良心も、聖霊によって私に対し証ししていますが、

9:2 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。

「私の心には絶えず痛みがあります」これは真実な告白です。「キリストにあって」とありますが、キリストは真理そのものです。「キリストにあって」嘘を言う人はいません。これは神の御前で嘘偽りは言わないという意味です。パリサイ派の伝統では、あることを証明するために2~3の証人の証言が必要です。パウロは、「私の良心」（キリストにある良心）と「聖霊」（内住の聖霊）とを証人にして、自らの告白が真実であることを強調しています。その告白の内容は、「大きな悲しみ」があり、「絶えず痛みが」あるということです。同胞であるイスラエルが、伝統的な宗教観と律法主義のためにキリストの福音を受け入れようとしないことが、パウロに圧倒されるような大きな悲しみを与え、心に絶えず襲ってくる痛みとなっていました。

9:3 私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。

「キリストから引き離されて」とありますが、これが不可能な願いであることは、パウロ自身が一番よく知っていました。彼は、「キリスト・イエスにある神の愛から切り離されることはない」と8章で宣言しています。パウロが感じている悲しみと痛みは、人類一般に関するものではなく、イスラエル人のための痛みです。彼はイスラエル人のためなら、「のろわれた者となることさえ願いたい」と言います。「のろわれた者」は、ギリシア語の「アナテマ」で、新共同訳は「神から見捨てられた者」と訳しています。ヘブル語の「ヘレム」を七十人訳聖書（旧約聖書のギリシア語訳）は「アナテマ」という言葉に訳しました。ちなみに、「ヘレム」という言葉はヨシュア記6:17に出てきますが、新改訳はそれを、「聖絶」と訳しています。これは、神から捨てられ、キリストから切り離されたものとなることを意味しています。それがどんなに深刻かつ恐ろしいことか十分知っており、また不可能なことであるにもにかかわらず、パウロは呪われ、切り離されなされても本望だと言っているのです。それほどまでにパウロは同胞を愛していました。

このパウロの痛みは、神の痛みを体現していると思われます。パウロは自身を「キリストの使節」として語っています（2コリ5:20）。キリストの愛が、パウロを取り囲んでいたのです（2コリ5:14）パウロの悲しみと似たものに、モーセの祈りがあります

(出 32 : 31~32) 金の子牛を造って、神に背いたイスラエルのためにモーセは身を投げ出して祈ります。

出 32:31.32 そこでモーセは【主】のところに戻って言った。「ああ、この民は大きな罪を犯しました。自分たちのために金の神を造ったのです。今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださるなら——。しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。」

モーセもまた、イスラエルを赦してくださるなら神から引き離されてもよいと祈った人でした。モーセもパウロも、同胞から誤解されていました。モーセは民を捨てて逃げたのだと思われ、パウロはキリストを宣べ伝えることで、裏切り者とされ攻撃されました。しかし、モーセの祈りとパウロの祈りは、彼らの同胞への愛であり、それは神ご自身の愛でした。

そして、主イエスはご自分の民によって、神を冒瀆した罪で十字架につけられましたが、イエスこそがメシアでありました。イエスは十字架で拷問されている最中に祈りました。

ルカ 23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」

今毎日、ラインで日本各地のために祈るガイドを送っています。一年で全都道府県のために祈れるようになっていきます。私たちも主に同胞日本への愛を与えていただき、とりなし祈りましょう。

3. イスラエル人の7つの霊的特権

9:4 彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法の授与も、礼拝も、約束も彼らのものです。

9:5 父祖たちも彼らのものです。キリストも、肉によれば彼らから出ました。キリストは万物の上であり、とこしえにほむべき神です。アーメン。

「彼らはイスラエル人です」とあります。1~8章では、「ユダヤ人」という呼び名が使用されていましたが、これは民族的なアイデンティティーを示す言葉です。9~11章では、「イスラエル」という言葉が12回出てきます。それに対して、「ユダヤ人」は2回だけです。イスラエルとは、神との契約関係を示す言葉です。イスラエル人の特権は、すべてこの契約関係を土台としたものです。ここからも、1~8章は個人的な救いが取り扱わ

れ、9～11章のイスラエルの救いとは、神と契約を結んだ国家としてのイスラエルの救い
が取り扱われていることがわかります。

次にパウロは、イスラエル人の7つの特権を挙げています。イスラエル人の7つの特権
は、4～5節に記されていますが、これは、3章1～2節と関連しています。ここでは、
「3:1 それでは、ユダヤ人のすぐれている点は何ですか。割礼に何の益があるのですか。
あらゆる点から見て、それは大いにあります。第一に、彼らは神のことばを委ねられまし
た。」とありましたが、パウロはそれ以上議論を発展させないで、途中でやめていま
す。その続きが、9:4～5に出ているのです。

特権1：子とされること

(1) 出 4:22 そのとき、あなたはファラオに言わなければならない。【主】はこう言われ
る。『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。4:23 わたしはあなたに言う。わた
しの子を去らせて、彼らがわたしに仕えるようにせよ。もし去らせるのを拒むなら、見
よ、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺す。』

イスラエルは民族的に「神の子」とされており、クリスチャンは個人的に「神の子」とさ
れています。

(2) ホセ 11:1 イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、エジプトからわたしの子を呼
び出した。幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した

神とイスラエルのこの関係は、今も壊れていません

特権2：栄光

(1) 出 13:21-22 【主】は、昼は、途上の彼らを導くため雲の柱の中に、また夜は、彼ら
を照らすため火の柱の中において、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くため
であった。昼はこの雲の柱が、夜はこの火の柱が、民の前から離れることはなかった。

イスラエルの民は、シャカイナグローリー（神の栄光）に導かれて荒野を旅しました。

(2) シャカイナグローリーは、①荒野、②幕屋まくや、③神殿、④そしてメシアである
イエスの内に現れました。

特権3：契約（複数形）

(1) 神がイスラエルと結んだ無条件契約は、4つあります。①アブラハム契約、②土地の契約、③ダビデ契約、④新しい契約がそれです。

(2) 無条件という意味は、「これらの契約は、イスラエルの不真実によって破棄されるものではない」ということです。つまり、今も有効な契約なのです。

特権4：律法を与えられること

(1) シナイ契約によって、イスラエル人にはモーセの律法が与えられました（出19：16～20：1）

(2) これは条件付き契約です。モーセの律法は、神の民に生活の指針を与えました。キリストの十字架によって、その要求は満たされましたので、今は廃棄されました。

特権5：礼拝

(1) この言葉は、「神への奉仕」とも訳せます。ギリシア語で「ラトレイア」です。神への最大の奉仕は礼拝です。

(2) 礼拝に関する規定は、レビ記に記されています。①祭司職、②幕屋。③いけにえのささげ物などの規定は、すべてイスラエル人のものです。

特権6：約束（複数形）

(1) イスラエル人には種々の約束が与えられています。

(2) メシア預言は、その中心にあります。①初臨、②再臨の約束があります。

(3) メシア的王国の預言もまた重要な約束です。これは、人類一般に対する約束でもありますが、特に、イスラエル人に対する約束という側面が強いものです。

特権7：先祖たち（族長たち）

(1) 申10:15 **【主】**はただあなたの父祖たちを慕って、彼らを愛された。そのため彼らの後の子孫であるあなたがたを、あらゆる民の中から選ばれた。今日のとおりである。先祖たちとは、アブラハム、イサク、ヤコブのことです。

(2) キリストもまた、人間としては族長たちから出ました。つまり、ユダヤ人だということです。しかし、いかに多くの特権が与えられていても、信仰がないなら救われませ

ん。イスラエルは特権の上にあぐらをかき、謙遜に歩むことを忘れてしまいました。私たちは、彼らの失敗から教訓を学ぶ必要があります。

イスラエルは不信仰のゆえに神から見捨てられ、教会が新しいイスラエルになったという教え（置換神学）があります。しかし、これは誤解です。

神の国の原則は、後の者が先になり、先の者が後になるということです。このことが異邦人の救いに関して起こっています。後の者であった異邦人が、イスラエル人に先んじて救われたのです。将来、イスラエルの救いは必ず成就します。パウロはローマ 11 章でそのことを詳細に論じています。先取りして要点を説明すると、①イスラエルがメシアにつまずく、②その結果、異邦人に救いが及ぶ、③それを見てイスラエルがねたみを起こし救われる。ということになります。これが神の計画の 3 段階です。もしイスラエルが見放されたとするなら、私たちの救いも不安定なものとなってしまいます。イスラエルの救いは、キリストの地上再臨の条件です。再臨信仰を持つ者は、イスラエルの救いのために祈るべきです。

最後に

それにしても 8 章の輝かしい福音の勝利と、9 章のパウロの苦悩とはいったいどのように調和するのでしょうか。実はここにもキリストの福音の特質がよく現れているように思います。私に与えられた天にも昇るほどの喜びを味わうほど、自分に身近な人々に対しての心が痛む。つまり、福音の信仰とは決して、自己満足的な信仰へは導かないということです。自分さえ救われればよいか、信じていない人々に対する軽蔑や優越感は、福音の本質とは異なるものだからです。むしろ家族や同胞の救いのためなら、自分が身代わりとなって、呪われたものとなっても良いとさえ思う。これこそがキリストの犠牲的な愛によって救われたものにふさわしい心と言えます。

これからしばらく扱われるイスラエルの救いの問題は、すでにこの手紙の初めからパウロの念頭にあったと思われます。パウロはこの問題を扱うために手紙を書いたのではないかと考える人がいるほどです。旧約聖書に記された神の選びはどうなったのか。神がユダヤ人をお見捨てになったのか、など一見私たちには馴染みのない、どうでも良いような事柄に思えるかもしれませんが。しかし考えてみますと、なぜ私たちは二千年も昔のパレスチナの救い主を信じたのでしょうか。なぜ外国の宗教と揶揄されるさえ信じるに至ったのでしょうか。この疑問に答えるには 8 章まで論じられていた救いの神秘とはまた別の歴史を導く神の壮大な救いのご計画の神秘を学ぶ必要があります。

それは、福音とは何かではなく、なぜ福音に導かれたのかという問題です。